

白杵磨崖仏造頭の背景

賀川光夫

はじめに

一、白杵磨崖仏

二、石仏境内の発掘

三、磨崖仏創設の年代的考察

四、伝満月寺の性格

五、磨崖仏造立者

おわりに

はじめに

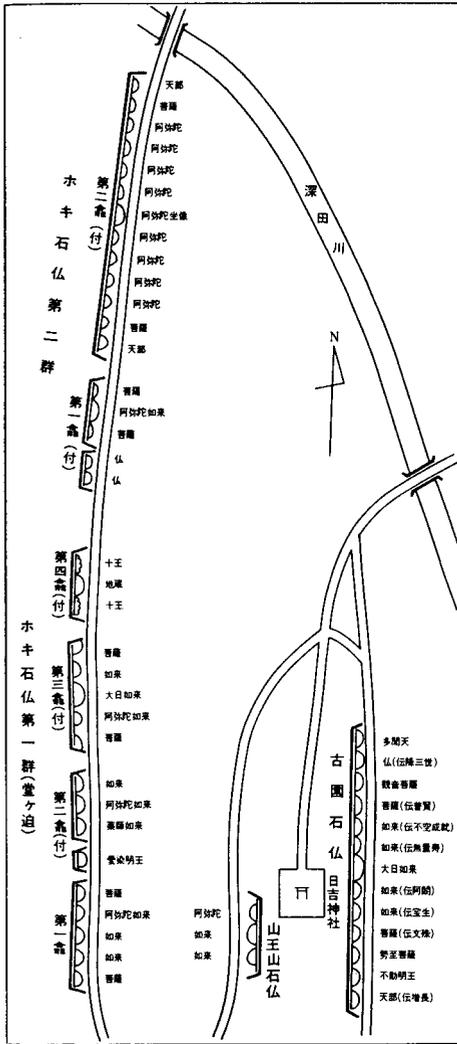
大分県は豊前・豊後の二国からなる。豊前には七世紀後半各所に伽藍が建立され、畿内文化の影響を強く受け入れた。そして宇佐八幡境内の弥勒寺は官宮寺院の性格が強く、それ故に豊前一带に仏教の興隆をみるに至った。これに対して豊後は平野に乏しく、山岳によって磨崖仏が営まれた。「豊後磨崖仏」という名は浜田耕作博

士によってもちいられた名称であるが、国東半島、大分川、玖珠川、大野川流域、そして臼杵川などに沿って広範囲に点在している。これらの磨崖にはほんの一部を除いて造像年、造像理由を明らかにした記録や金石銘文がなく、謎につつまれている。これまでの研究は主として仏教美術史的な観点で検討が加えられてきた。それだけに造立者についても北部の磨崖仏は仁聞が、中部は日羅によって、南部は蓮城があつたとされている。そうした口碑についてはいまだに問題が多い。

磨崖仏の代表は北部にあつては熊野石仏があり、中部では元町、岩屋寺石仏、菅尾磨崖仏が注目される。南部の臼杵石仏群は、特に秀作で豊後磨崖仏の代表的なものである。石を材料として木彫風に仕上げる技法は、軟質の凝灰岩に恵まれたことにもよるが、都振りよろしくまさに木彫で言う定朝様の技法そのものと言える。臼杵と菅尾磨崖仏は造像技法が類似してほぼ同じ時期とみられ、平安後期十二世紀末、藤末鎌初の代表的彫刻とみてよい。その造像には中央仏師又は宇佐附近に設けられたと推理される工房において修練を積んだ木彫師があつたものとも考えられる。

代表的磨崖仏の中で豊後高田市の熊野石仏の場合は、その大きさと造頭技法の上から県南のものと大きく異なっている。この主尊は大日如来と伝えられ、豊後磨崖仏の中でも刀法の鮮やかな例として知られている。

さて臼杵磨崖仏は、前述の如く通称豊後磨崖仏の中でもっとも重要で、この石仏の謎解は数多くの磨崖仏造頭の問題解決につながる。これまで造頭の理由、その年代、技法、作者、そして願主などについてのすべては謎であつた。そしてこの謎解に挑戦した先輩学者の優れた見解も多い。その多くは造立時代を歴史環境から考察したり、仏教美術的研究にもとづく技法、形態学の立場を取る場合が多かつた。最近これらの問題に義軌の



第1図 白杵石仏配置図

—大分の古美術(文化庁作成)より転写—
 (古園石仏は図面の関係で東向に図示され
 ているが、東南向きに配列されている。)

研究を深め、加えて考古学的検討を加えた研究も進められて来た。石仏地帯から出土する外来陶器の研究や工房址研究、遺物には理科学的検査も必要となった。こうした研究に加えて磨崖仏造像の基礎となる伽藍、窟仏や磨崖仏について、中国、韓国のそれとの対比検討も必要となった。学際的研究に加えて国際的研究の成果もある程度ふまえて白杵磨崖仏の造頭の問題をまとめてみることにする。この小論は昭和二十三年、戦後はじめ白杵磨崖仏を訪れ、以後長期間のあらゆる調査に関係することができた筆者のこれまで蓄積した研究の概論

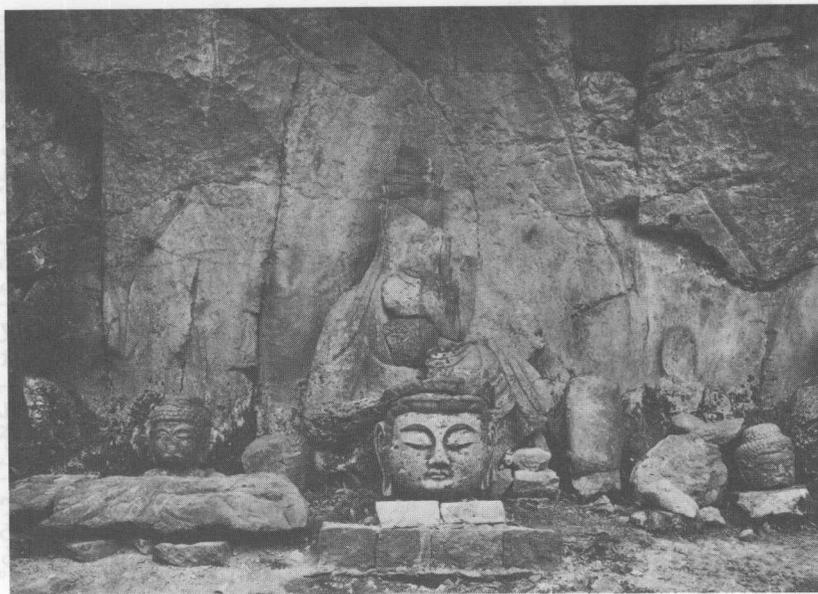
でもある。本稿各項目についての詳報は近くまとめたうえで発表したいと考えている。

一、白杵磨崖仏

国東半島以南、大分川や大野川の流域と海部一帯が豊後磨崖仏の地帯である。その代表的な白杵石仏は豊後水道に沿ったリアス式海岸の入江の奥詰めを白杵川に沿って西に四キロの地点にある。石仏一帯は、深田の集落に近い小盆地で、凝灰岩の磨崖がいたるところにみられる。磨崖仏はこの盆地周辺の懸崖のうち、条件のよい地点をえらんで造顕されている。

盆地南部には左右が小谷ではさまれた大日山があつて、その山頂近くに日吉社（山王権現を祀る）がある。この大日山の北麓と、西側小谷を挟んで主要な磨崖仏が彫刻されている。北麓の古園石仏は総高二・八六メートルの大日如来（金剛界）を中心に五如来四菩薩二明王・二天を一列に配置している。この地の磨崖仏は下部に断層があり、粘土となるため全容を製作できず、上半身のみ像が多い。わずかに大日と左端の多聞天には下部を別の石で彫刻して寄せ合せている。大日如来を中心に如来・観音・勢至・普賢・文殊など菩薩の代表を並べ、降三世、不動明王を左右に配して左右端に多聞、増長の二天をもつて守護にあたらしめている。その彫刻は素晴らしく白杵石仏の圧巻である。

大日山の西麓に山王石仏がある。通称釈迦三尊で、薬師・阿弥陀の二尊を左右に配し、主尊は童顔に彫刻され、総高は二・七二メートルである。この部分の凝灰岩は熔結岩で一部は砂のようにもろく、保存の困難なところで



第2図 大日如来（古園石仏）

ある。山王石仏と小谷を挟んで対峙してホキの磨崖仏群がある。ホキ石仏一群は四龕からなり、その一・二龕の彫刻は古い。

一龕は釈迦三尊で左に阿弥陀・右に薬師を配置するが二龕に次ぐ時代の作と考へられる。

二龕は阿弥陀を中心とする如来三尊の坐像で、左に釈迦、右に薬師を配置する。中尊阿弥陀は像高一・七八メートル、裳掛け座に坐す。

ホキ石仏二群は、一、二龕からなる。一龕は阿弥陀三尊で、中尊が像高二・七八メートルを計かる大形の磨崖坐像である。左に観音、右に勢至を配置し、剝落した不動、後刻の地藏二体がある。このうち阿弥陀三尊は、古園石仏の大日とともに流麗且つ観想的な、美しさに仕上げている。

二龕は九品弥陀と観音、勢至の二菩薩、持国、多聞の二天を配している。全体としては剝落が多く、尊形も明らかでないが、中央の一体は坐像で、

来迎印がみられ、「九品仏」又は「九体仏」である。

白杵石仏には、このほかにも多数の彫刻があるが、古園大日主尊の十三体、山王の釈迦三尊、ホキ一群二龕の阿弥陀三尊（如来形三尊）、ホキ二群阿弥陀三尊を含めた四群二十一体の諸像が造期を同じくするものと考えられる。

石仏の他に注目するものとしては、ホキ一群石仏に近い中尾の丘に、一石造の五輪塔二基がある。この二基のうち一基は総高一・五一メートルで各部に発心、修行、菩提、涅槃の五大種字をもち、地輪に左の銘文がある。

「嘉應貳年歲次庚寅、七月二十三日」

小形の五輪塔は総高一・〇四メートルで、地輪には、「千部如法経願主遍照金剛□□承安二年歲次壬辰八月十五日次日辛」とあり、本塔の造立が、如法経を納めるためにあつたことが知られる。如法経すなわち法華経を書写し、供養することは、古くからおこなわれているが、『玉葉』にみえる後白河法皇の仙人御所での文治四年（一一八八）八月十五日よりの如法供養は、仏教破滅に備える重要な儀式であつたのである。

この五輪塔の承安二年の如法供養も同義と考え、石仏造願そのものが仏法供養で、ここに問題があると考えられる。

日吉塔は宝篋印塔の古式形で巨石上に組み立てられ、五個の石造の積み重ねで総高四・二メートルに及ぶ。特に塔身は稀な構造で、天沼博士をして石厨子と呼ばしめた如く、周辺に幣軸が刻印され、内は深くえぐられて梯形の平面を有し室となっている。全体としては優美な石塔で、呉越王錢俶の金剛小塔の形からでていると称

される。造頭は鎌倉初期と推理されるが、この時代推定がまた、先の如法塔（承安二年五輪塔）との関係で、白杵磨崖仏の造頭完成を考える上できわめて重要な建造物である。

さて白杵磨崖仏の造頭を考えるためには通称満月寺のことが気になる。僧蓮城は満月寺を創設したといわれる。それを伝える記録はいずれも江戸時代のものであるが、五院を整備した伽藍建立を述べている。その記録の代表的なものは、延享元年（一七四四）の『豊鐘善鳴録』である。もう一つは享和三年（一八〇三）の『豊後国志』であって、いずれも満月寺について明記している。この二つの著者は深田地区を探索した形跡があり、実地において詮索した結果とみられるので注目しておく必要がある。満月寺という寺を記録から証明し、石仏の造頭まで具体的に推理することは現在の段階では無理と言わざるを得ない。

石仏造頭の実態を明らかにする方法として、記録や金石文が必要であるが、ここではいずれも推察の域を出ない。

ところが昭和五十一年（一九七六）より「白杵磨崖仏周辺公園整備計画」が実施されることになり、その範囲の学術発掘がおこなわれることになった。発掘は通称満月寺趾（現寺域）から盆地中央、古園石仏前庭に及び注目すべき問題が提起された。

二、磨崖仏地域の発掘

昭和五十一年（一九七六）より五十七年（一九八二）まで七次の調査がおこなわれ、遺構、遺物が確認された。

調査は盆地東側に現存する満月寺に接して西側の調査区からはじめ、ここで建物趾の一部がみつかった。その結果現存の満月寺は往古の堂舎上に建てられていることがわかった。遺構は、新旧二時期の礎石列を中心とし礎石は凝灰岩をもちい、根固石などをもちいず土寄せをおこない固着させている。柱間は西側が二・一五メートルの等間（七尺）で五間、全長一〇・六〇メートルである。南側は隅柱（隅礎石の心距離）間が一〇・九〇メートルである。状況から判断して、建物趾は五間、五間の方形と考えられる。とくに南北列（西側）の礎石や基壇は整然と確認された。この凝灰岩の礎石に、珪岩質の礎石を上乗せした新しい建物趾が確認された。この新しい建物趾は、旧礎石上に礎石を積み上げ、南、北端を一間延長させて七間としている。（七間七間）この新旧二つの建物の細部の状況は、現存する建物の下部になり調査は不可能であったが、西側の礎石群及び基壇の状況から過去二期の堂舎を確認することができた。

新旧二期の建物については、礎石の状況や、基壇の状況によって明らかになったが、その時代判定には、出土の古瓦や土師器、陶器など出土遺物で考証されなければならぬ。幸いに古代・中世に及ぶ古瓦の分類は昭和二十九年（一九五四）よりの宇佐八幡境域弥勒寺遺跡の調査に関連して層位的（文書資料を参考にして）研究を実施した。弥勒寺金堂は、奈良、平安をへて中世に及び各種遺物が発見され、それらの遺物は周辺遺跡から発見される遺物と深い関係にあり、標式的存在である。

旧満月寺趾の建物の創建は、瓦葺の堂舎であったようである。その瓦の軒先に使用された文様瓦のうち、軒丸瓦は、細い尾部が長く、それが外側で接続して圏線を形成する。その外側に珠文列が狭い間隔で二一配置する。瓦当の径は一三五センチで裏側には細かい布目がみられる。この軌丸瓦に対して軒平瓦は、二四・八センチ

白杵磨崖仏造頭の背景

		年代	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	組み合わせのある地区
I	前半	鎌倉時代 前期	I類 	I類 	I	I	現満月寺境内
	後半	鎌倉時代 後期 ↳ 南北朝時代	II類  III類 	II類  III類 			I
II	期	室町時代 前期 ↳ 後期	IV類  V類 	IV類  V類 	II	II	現満月寺境内
				類			類
III	期	江戸時代	VI類 				現満月寺境内

第3図 白杵石仏地帯より出土した古瓦編年図

菊田徹の分類による

チの横幅を計り、内部に界線があり、その中に径一センチの珠文一四が併列されている。この珠文は中心から右半分が幾分間隔が狭くなり、顎がやや曲線的で布目が顕著に残されている。

軒丸、軒平二種類の文様瓦はともに特徴があるが、軒平瓦は宇佐弥勒寺金堂趾の出土瓦と一致する。弥勒寺の出土瓦は、層位と文書を併せ、更にそれぞれの古瓦の文様や技術の流行などを検討して年代を決めたこともあり信頼性ももてる。その資料の中から珠文を横一列に並べる伝満月寺跡、旧建物趾出土の軒平瓦は、弥勒寺金堂趾出土の古瓦に一致する。その年代の判定は、古瓦文様の推移や、技術、他地方での流行、それに文献資料の裏付けによって、鎌倉前期と推定することができる。具体的な文献資料は、宇佐八幡関係文書のうち『吾妻鏡』などがある。

吾妻鑑 図史大系

建久三年正月三日、弥勒寺金堂焼亡、本尊薬師像、并日光菩薩・毘沙門天等为二灰燼、

左弁官下 太宰府

応任天喜元例八幡宇佐大官司宇佐公通宿祢并弥勒寺相共造营当寺金堂一字事

右得彼寺所司等云正月四日解状稱、謹換案内、当寺者大菩薩御願、嚴重異他之仁祠也、大菩薩、薬師、弥勒、為御本尊、有御託宣建立、回茲、金堂本尊者、薬師、講堂本尊者、弥勒也、御願仏事、宇佐宮神官、弥勒寺所司、相並勤行之、先正月元三日夜者、金堂御行、是則宇佐宮御修正也、於宝前発願、結願、有之当御堂素、奉

安置大菩薩御正躰之上、三箇夜之間、每夜自宇佐本宮、黄金御正躰御行、宮司神官列參、又寺家所司供僧、為用僧被行之、而各三箇夜宛尅、御修正早、黄金御正体還御本宮之後、所司神宮各退出之間、有此事、先召問當番長講神兼之處、申云、御修正躰、休息一寝之程、此火出来者、於元甕者不知給之、但自正面二間庇、燃上之時見付云々、竊考旧貫、天平年中草創以來、歷四百余廻春秋之間、仁和永承二ヶ度有焼失云々、其各数字堂々抔地、併成灰燼云々、而今度只、金堂老宇炎上、抑四面在堂塔、相去此檐所謂、東面有経蔵、中間四丈六尺、南面有東三重西三重兩塔、中間各四丈、西面有鐘椽、中間四丈六尺、北面有講堂、中間四尺、金堂安中央、壇上殊高、虹梁椽天、当堂炎上之日、四面堂舎老宇不可残早、干時大雨徐降、而湿消羅、蔽風尚不吹、而炎光直登、加以於境外、或有不降雨之所、或有疾風吹之村云々、爰至于当伽藍之砌、風雨応宣之条、炎火之中可謂奇特歟、情案物、去元暦元年七月、豊後武士、乱入宇佐宮之尅、宮寺併成汗穢地畢、其時寺家同可被清祓行之由、所司頻雖令申、無其沙汰令黙止早、而適大菩薩御座、御堂一字炎上之条、若是神慮令然歟、凡鎮護国家道場也、速欲被經奏聞、仍所司等参洛之程、不易日不改時、先以脚力言上事由、者左大臣宣奉勅、依諸卿定申、堂宇者任天喜例、令大宮司并寺司等造宮、於院内堂已下者、宇佐遷宮以後、任先例、令修補之者府宜承知依知依宣行之

建久三年十二月一日

大史小槻宿祢

右中弁平朝臣在

左弁官下

太宰府

応且依天喜官府且任建久宣旨仰大宮寺宇佐宿祢公仲令造營八幡宇佐宮弥勒寺金堂半分事

右得彼寺所司等去月廿日解状備、謹檢案内、当寺者依大菩薩御託宣、天平年中草創、金堂安置薬師如来、講堂鎮坐弥勒慈尊、各丈六金容、殊嚴重伽藍也、件金堂五間四面、当寺檢校与宇佐宮司相分半分、二間半、令造営者先例也、且天喜元年、官符支配明鏡也、而金堂去建久二年失火出来炎上畢、同三年任天喜之例、又寺司宮司各半分可造営之、至于諸堂塔者可支配管国之由、被下宣旨早、其後無何遲怠之間、同五年六年九年相并、四々度被下、綸旨、其状案文度々令進覽早、此内金堂半分、為宇佐大宮司役之処、宮司等或逝去、或不落居□諸推移早、爰公仲宿祢、補大宮司、於今者早任宣下之状、当堂半分、不日可遂造営之由、欲被仰下、者権大納言源朝臣通具宣奉勅依請者、府宜承知依、宣行之

建保三年九月十一日

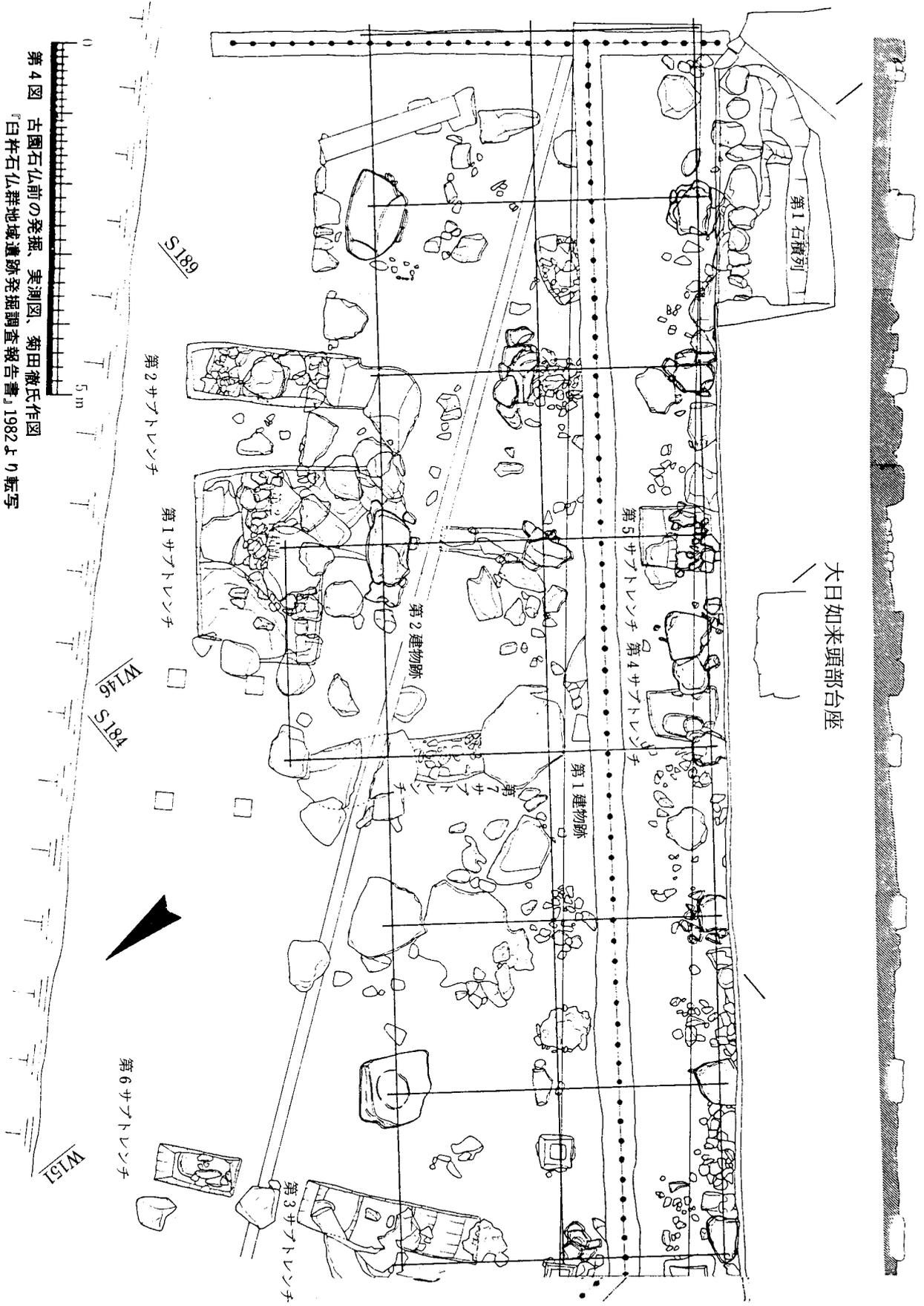
大史小槻宿祢

少弁藤原朝臣

右の建久三年の回録後に使用された瓦が、界線内に大型の珠文列を横一列に配置する軒平瓦である。宇佐弥勒寺と満月寺とがどのような関係にあったかは分明しないが、この瓦が相互に使用されていたことは確かである。しかもこの瓦が伝満月寺の創建瓦とみてよい。この瓦が宇佐弥勒寺建久三年回録後に使用されたとして、かりにこれを「建久瓦」と呼んでおくことにしよう。過去七度の満月寺跡の各堂舎趾の調査で、この「建久瓦」より古い古瓦、土師、輸入陶器などの出土がないことは、伝満月寺の創建が鎌倉初期を出ないということになる。

次に満月寺と磨崖仏の関係はどうであろうか。もつとも古い彫刻とみられる古園石仏附近の発掘状況をみてみよう。古園遺跡前の発掘は昭和五十五年（一九八〇）におこなわれた。ここでは昭和期の建物趾のほか、三間

大日如来頭部台座



第4図 古園石仏前の発掘、実測図、菊田徹氏作図
『白杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』1982より転写

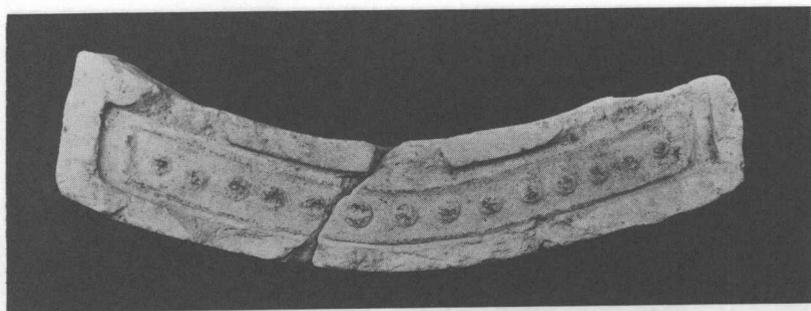
みよう。古園遺跡前の発掘は昭和五十五年（一九八〇）におこなわれた。ここでは昭和初期の建物跡のほか三層



第5図 古園石仏前の発掘（1950年）建物趾，礎石露出状況

七間の建物が覆堂の役割をなしている。中央の間は他の六間よりも広く三・〇三メートルで、他は二・四二メートルであるから桁行の長さは一七・五五メートルである。梁間は三間で岩に取り付く柱間の寸法は計算できぬから、前二間が二・二五メートルで四・五〇メートル＋二メートルとなる。この磨崖仏にそった横長の覆堂は満月寺趾と同じく、旧礎石上に新礎石が上乘せしてあり、二時期の遺構と考えられる。出土遺物も明らかに二時期をあらわし、その創設は「建久瓦」の出土で上限が決まることになる。

古園石仏前の建物趾は新旧二時期と考えられ、下部に礎石を安置したのは鎌倉初期「建久瓦」がそれを明らかにしている。したがって伝満月寺趾の創設と同じ時期になろう。古園石仏群前の発掘で注目されるのは、磨崖仏造頭工事において岩面の掘削がおこなわれ、その岩屑を敷き詰めて前庭



第6図 現満月寺境内より出土した軒平瓦（鎌倉前期）

を造成し、平坦にしていることが明らかになった。この前庭に礎石を安置して磨崖仏覆堂を建立したものと考えられる。覆堂の性格は不明であるが、磨崖仏を岩面を含めて包み込み、覆堂の役割を果たしたものとみられる。

覆堂は近代の建物趾を除くと新旧二期の礎石がみられ、瓦や、土師器などからみて創設は鎌倉初期、二度目の建替えは鎌倉後期とみられる。

昭和五十一年（一九七六）以降発掘がおこなわれた石仏周辺の調査は、伝満月寺境内、日吉塔一带、盆地中央の顕田地帯、古園磨崖仏地帯など広い範囲に及んだ。そして各地の調査区から遺構がみつきり、数多くの遺物が出土した。伝満月寺趾や日吉塔附近には建物趾が、湿地地帯では、生活趾又は工房地帯と推理され、古園石仏一带では覆堂舎趾がみられた。またこれらの地帯では、主に鎌倉前期から室町後期、一二世紀末から一六世紀頃までの遺物が集中し、この間に多くの遺物が存在した。

伝満月寺の創立を一部で伝えられるように平安時代以前とすることは考古学的研究からして否定される。遺跡の状況又は遺物の考察からみて上限は鎌倉前期とみてよく、周辺に存在する磨崖仏の創設についての再考が必要となる。

白杵磨崖仏の創設については、これまで数多くの学者によって論説され

てきた。その問題を企史考古学の見地から推論すると、ホキ石仏一群背後の五輪塔二基の形式、造立技法、それに造塔理由の銘文刻入がある。この金石文の判読は石仏造営の一問題を提起する重要なものである。更に伝満月寺趾の日吉塔の形式も特異で、その造立技法や形式からみても、鎌倉初期説は動くまい。とすると、五輪塔造立から日吉塔造立までの間は、先の「如法理経」の金石文と、「建久瓦」から推論する石仏切り初めから完成までと一致する。「津久瓦」の使用と日吉塔の造立を履屋を含めた白杵石仏の完成期とすれば、おりから豊後における初代大友入府と期を合せることができよう。

三、磨崖仏創設の年代的考察

磨崖仏の年代を具体的にあらわす史料や、金石文などは九州地方ではほとんどみあたらない。したがって磨崖仏を寺と考えることが消極的にならざるを得なくなる。しかし、磨崖仏が寺の境内につくられた例は中国には数多くみられるし、古くは雲岡石仏のように石仏寺としても類例が多い。そしてその造願に関する記録も割合に豊富にあることを考えにいとると、わが国の磨崖仏はたしかに特殊なものようである。しかし、白杵石仏の場合は、考古や美術史の研究が進み、造願に関する問題を次第に明らかになりつつあると言つてよい。

さて、わが国の磨崖仏で創立年代が記録や金石文から明らかかなものをひろってみると『宇佐大鏡』（宇佐八幡文書）の天喜元年（一一〇五三）の記録がある。この文書は大分市郊外の岩屋寺石仏に関する間接的なものであるが、ともかくこの時代の記録として唯一のものである。

四至東限市河、南限岩屋寺前、西限高坂横道、北限市河并田中寺。

とあって「岩屋寺」という文字がみえる。この附近には「岩屋寺石仏」と「元町石仏」の二つがあつて、どちらも美術的にみると平安後期の彫刻と言われており、両者のどちらかに当てればよい。この記録からすると、天喜年中にはすでに石仏は存在していたことになるので、この『宇佐大鏡』は石仏造像にとっては大切な記録といえる。そして豊後磨崖仏のうちでは平安後期造像の確実な記録である。また「岩屋寺」という文字から、磨崖仏を本尊とする「石仏寺」があつたことをしめしている。この記録にでる「岩屋寺」が「岩屋寺石仏」か「元町石仏」かの推理は今後に俟とう。

石仏そのものに刻銘のあるものとしては、奈良市春日山石切峠西側の通称穴仏、金剛界五仏の大日像左側に深い筆太の陰刻銘がある。

「久寿三季八月廿日始造之作者今如房願竟」

また、同所の阿弥陀如来向かつて右肩上に墨書銘があり、「保元二年廿月廿七日仏造始四月廿一日開眼」とある。この二つの金石文は久寿三年（一一五五）と保元二年（一一五七）に石仏を彫りはじめたことを記録したもので注目される。特に保元二年の墨書銘は三ヶ月弱の日子を要して完成されており、石仏造頭にかんして仕上げまでの記録として注目したい。仕上げまでの日子は像容の大小、その内容によっても大きく違うはずであるが、注目すべきである。

『宇佐大鏡』にみる「岩屋寺石仏」又は「元町石仏」の例、奈良春日山石切峠の例は、いずれも平安後期に集中し、わが国磨崖仏造像がこの時期を盛期とする証拠である。わが国磨崖仏最初の造像例として『常陸風土記』の一例がある。



第7図 承安2年(1172)在銘五輪塔と「如法埋経」の銘文

木津大田尻観泉寺にある石仏と伝えられている。

磨崖仏に関する記録はこのように少く、それを造頭せしめた理由まで記したものはない。しかし、奈良春日山石切峠の例は造頭の日子を述べている点で興味深い。石仏ではないが、大分県佐伯市郊外弥生町小倉の磨崖石塔群の一つに、製作期間を記した銘文をもつ例がある。小倉磨崖石塔群は、宝塔七基五輪塔三十四

国宰 川原宿禰黒麻呂時 大海之辺石壁彫造觀世音菩薩像 今存矣 困號佛濱」とあり、今に有りとあるので『風土記』成作時には存在していたはずである。したがって実際に存在した例であろう。特に川原宿禰黒麻呂は大和漢氏の出で一族とともに大和川原寺の創主者である。この点で石壁(磨崖)とあるのは仏像を彫刻したことをしめす記録として重要である。磨崖仏は現在存しないが、一説には日上市小

基よりなるもので、塔造頭に関する銘文は三ヶ所に刻まれている。それぞれ供養のためのものであることがわかる。それらのうち二基の宝塔は、願主「能海」が、自身の逆善と、「西妙一百日」の追善供養のため起立したものであることが知られる。さらに、長文の刻銘のなかに、

「嘉曆四年己巳八月六日切初之同十二日起立了同十六日供養」

とあり、七日間で完成していることになる。この宝塔は、総高一・八メートルの各部整美されたものである。奈良春日石切峠の仏像は三ヶ月弱をようしているが、これとの直接対比はできないとしても、各部整美された塔は仏像に比すべき技術を必要とする。これらの石仏・石塔については、その銘文によってある程度の見当がつけられることになる。

白杵石仏には、このような具体的資料をみいだすことができるであろうか。前にも述べたように、ホキ一群石仏群の存在する丘陵上の二基の五輪塔銘文に注目したい。銘にはそれぞれ嘉応二年（一一七〇）と承安二年（一一七二）に造立のことが記されていて、いずれも平安後期に属するものであることがわかる。このうち、承安二年の一基はとくに注目される。その銘文をみると、

「千部如法願主遍照金堂□□、承安二歲次八月十五日日次」

とある。この文面から、この五輪塔が写経埋納のためにつくられたことがわかる。写経埋納は末法思想により、弥勒下生まで仏法を保護する目的でおこなわれるものとされているので、仏法そのものの供養のため造塔とみてよい。ちなみに承安二年は入末法の永承七年から一二〇年の後にあたり、埋経の盛んな時期である。承安二年は中央において藤原氏と興福寺の間に争いが起こった年でもあり、地元にあつては、その十三年後に豊後武

士団の棟梁緒方推栄が宇佐八幡に乱入し、八幡宮及び弥勒寺を全焼させ、神人三名を殺害するという事件が起こつて、末法の不安が高まつた時期でもある。

大分市岩屋寺又は元町石仏の存在を記録した宇佐大鏡は、天喜元年（一〇五三）であるが、入末法はそれより一年前の永承七年（一〇五二）にあたる。入末法から三〇年後の永保二年（一〇八二）には富士山が噴火して世情は騒然たるものがあつた。その翌年に国東六郷満山本山本寺津波戸山水月寺近くで、写経と埋納がおこなわれている。「永保三年（一〇八三）九月二十三日津波戸山於供養」と刻銘された経筒は極度に末法を意識したといえるが、富士山の噴火にも起因したものとも考えられる。岩屋寺又は元町石仏は、このような時期に造立されたものとみてよい。

白杵中尾丘陵の承安二年在銘の写経埋納も、末法を強く意識しておこなわれたものと考えると無理がない。ここでこの承安二年の写経埋納が、その場所から推察して石仏造営に着手した理由の一つにあげられるとみるのである。これまでの調査で発見された遺物には、平安後期にあてるものは皆無であつた。石仏に關係する範圍で、嘉応・承安の在銘塔によつて平安末の記念碑をみたのは唯一の資料である。前述の如く、建久三年の回録による宇佐弥勒寺の古瓦が、石仏前の堂舎から発見されたことは、堂舎建設の時期をそこに置くことのできる明らかな証拠である。かりに承安二年切り初めた磨崖仏は覆堂舎を含めて建久三年に完成したとすれば、その間二〇年を要したことになる。

白杵磨崖仏草創が中尾台の一石五輪塔に刻銘された承安二年の如法埋経にはじまり、『吾妻鏡』にみえる宇佐弥勒寺、建久三年の回録後に使用されたとみられる「建久瓦」の裏付けによつて伝満月寺、古園石仏の覆堂が

完成されたのは鎌倉初期とみることができる。

発掘によって証明された鎌倉後期、室町時代の古瓦や、土師器などは、ホキ石仏一群三龕の如来形三尊（大日中尊）や同四龕の地藏十王などの諸尊追刻をあらわすものであることを無理なく推理させてくれる。

磨崖仏の創設が如法理経にあるとすると、弥勒下生の願望悲願による末法思想の中にあつたとみられる。弥勒信仰については、当麻寺の本尊が有名であり、宇佐弥勒寺講堂の本尊は丈六の弥勒如来であつたと記録されているから、すでに八世紀頃は多数の弥勒如来、菩薩形などが存在している。

宇佐虚空蔵寺塔趾の壁面には弥勒の如来形佛像を彫刻した埴仏が壁面荘嚴にもちいられた。七世紀には弥勒信仰が九州でも盛んであつたことが知られる。このように弥勒信仰をみると、そもそもわが国に仏教が公伝したとする『元興寺伽藍縁起并流起資財帳』には弥勒菩薩がある。したがって弥勒に関する信仰は深く、各地に秘められた記録や遺品によって証明されるものと考ええる。この弥勒信仰が如法理経という形で、下生説法を行うことを願望とするのは確かに平安後期である。このことについては稿を改めるつもりである。

四、伝満月寺の性格

白杵石仏が承安二年に写経埋納して五輪塔を建立し、石仏像造の如法による供養をして切りはじめたとしてどれくらいの日子を要したであろうか。先に上げた奈良春日山石切峠の記録を全面的に利用してあてることが無理として、一体の像に三ヶ月弱を要するということは参考になる。これを白杵石仏群で、明確に定朝様、平



第8図 阿弥陀如来 (ホキ二群一龕)
—西方阿弥陀—

安後期の様式をもつ、ホキ二群一龕の阿弥陀三尊、ホキ一群二龕の三尊(阿弥陀中尊)、山王如来三尊(釈迦三尊と称されている)、古園大日如来など十三尊などにあてるとほぼ平安時代の終末におさまる。かくしてそれぞれに堂舎を建立すれば、切り初めて堂舎完了まで二〇年後の建久年間にすべてがおわる計算になる。

数多い白杵磨崖仏のうち、藤原様式をもつホキ一群、二群、山王、古園の右にあげた石仏のみをあげて若干の考えを述べてみよう。

写経埋納と浄土思想とは末法の危機を克服するために天台に源流がある。西方浄土の莊嚴の様子を、定朝の阿弥陀如来は最高の芸術で高めていった。肉薄の彫刻と伏眼半開の眼差しは、阿弥陀の相好を美的、観想的にあらわす効果をあげている。この阿弥陀浄土が石仏造像に強くあらわれていることは否定できない。大日山西方の谷の西側にホキ一、二群の阿弥陀三尊仏がある。ホキ二群一龕の三尊は観音、勢至を左右にしたがえた所謂三尊形式である。中尊は二・八九メートルの巨像で、手の部分は剝落して不明であるが、全体の状況からすると、上品上生の結印をとるものとみてよい。ホキ一群二龕は三如来坐像で中央が阿弥陀如来である。この二ヶ所の磨崖仏はいずれも阿弥陀を中心につくられており、技法的にも優美であって、造頭の先後

関係は付けられない。強いて言うならば、ホキ二群一龕のそれは観想的で、木彫の味が存分にあらわされている。

さてこの二ヶ所の阿弥陀三尊は先にも述べた如く、西方に位置して浄土をあらわすことはその位置からみて明らかである。田村圓澄教授は、本来は大神一族の墓地ではなかったか、との推論をくだしている。浄土教における西方思想を意味し、この位置は阿弥陀堂と考えてよい。

山王石仏は、通称「隠れ地藏」と言われていたほど童顔をした石仏で、地藏の容貌をしている。三尊形式でこれまで中尊は釈迦とされているが、ホキ一、二群の西方浄土、阿弥陀堂からすると、東方に位置する薬師如来を中心とした三尊形式とみてよい。阿弥陀堂に対して、この一群は、薬師堂の場所とみてよい。

古園石仏は南にあつて、衆僧が仏事をおこなう金堂と考えてよい。本尊は大日如来で、五智如来を彫刻し、菩薩、明王、天部を配置することになる。このようにみると、満月寺は盆地中央を占める堂舎と磨崖仏覆堂を含めた石仏寺の性格をもつことになる。

さて、満月寺石仏寺の構想は、石仏各種如来像の配置から盆地中央の堂舎に加えて金堂、薬師堂、阿弥陀堂など石仏群が加わり、広大な伽藍が配置されることになる。この重要な問題を決定するために古園石仏前の発掘は注目された。

昭和五十五年に発掘が行われた古園石仏前の覆堂跡の確認は、この構想を一段と固める結果となった。古園石仏の金剛界大日如来を主尊とする諸像は、金堂の須弥壇に配列されたもので、北を向いている。御堂は、この須弥壇を含めて南北三間をとり、一部が磨崖に懸け造りとなる。東西は、七間で、その規模は東西一七・五五



第9図 薬師如来と推定 (山王石仏)
—東方薬師—

と、この構想のひとつの弱点となりかねない。しかし、白杵磨崖仏をはじめとし、大分県中部・南部のものは、日羅、蓮城の作といわれ、その共通した特徴として、石材をもとにして木彫風に仕上げられる技法がとられている。こうした点からみて、石仏を木彫に見せ、天台特有の環境で堂塔を配置したことは、きわめて稀有なこととみえるが、白杵磨崖仏での説明から次第に明らかになろう。

メートル、南北七・五〇メートルを数える大きな建物である。ここは石仏の造頭にあたって削り取った石材などを詰め、その上に土を敷き込み、礎石を据えていることがわかった。もとは傾斜の強い部処をこのように平坦にして、覆堂を建てたことになる。ここで石仏寺の構想は固着することになったのである、天台浄土の根源を比叡山に求めるとして、そこに磨崖仏は無い。そして他に石仏寺を意味するところがないとする

五、磨崖仏造立者

白杵磨崖仏の創設が平安末期に切り初め、鎌倉初期に覆堂を含めて完成されたこと、そして磨崖仏を堂舎として取り入れた「石仏寺」の性格をもっていたことなどが明らかになりつつあるように思う。ここで、磨崖仏の造立者は誰であったのか、これにも興味深いものがある。

大分県各地の磨崖仏については、国東半島は主として仁聞が、大分市周辺は日羅が、そして、白杵石仏は蓮城などが作者とされている。しかしそのいずれもが磨崖仏造立の人物とは考えられない。豊後磨崖仏の主なものの一部を除いて神体山をもつことが注目される。こうしたことは新羅の神体山と磨崖仏との関係と何らかのつながりがあるものと推理される。

最近齊藤忠博士は、「韓国における窟仏、磨崖仏とその石工技術の日本への導入に関する一試考」と題する論文を草し、韓国の窟仏、磨崖仏が百濟、統一新羅の各時期に発達した次第を述べ、ついで編年的な序列を整理された。そして韓国をはじめ、九州の窟仏、磨崖仏が、中国唐時代に源流を求めべきだとして、開元新訳の経軌を伝えた玄昉僧正の活躍を重視している。博士は慎重に玄昉との関係を考えることも取るべきではないとしながらも、彼が帰朝した天平七年（七三五）の東大寺造営までの間には磨崖仏造営もあり得たとしている。

齊藤忠博士はこの論文で「白杵の窟仏、磨崖仏造管の背景」と題する一項目を設け、「その直接の関係を中国に求めることは首肯されるところである。」として更に「造作に当たった石工が花崗岩技術に特殊な才能をもつ

新羅の石工と全く無関係であったとは思えない。」として奈良時代の半島石工の活躍の一端を正倉院御物四神十二支浮彫の白石板の銘文を参考として述べている。

小田富士雄博士の論文「九州の古代寺院」には七、八世紀の寺院出土の創建瓦に百済系古瓦のほか新羅系古瓦が豊前一带に分布することをあげている。この新羅系古瓦の分布地帯を拡大すると、広義の豊後磨崖仏地帯となる。更に新羅系古瓦を出土する寺院の背景に秦氏につながる帰化人系集団の生活地帯がある。

右のような大陸・半島の仏教の影響が九州地方に伝えられたことは疑いないとして、それを磨崖仏と関係づける考えを明確にしたのは斉藤忠博士の論文である。これまでの多くの論文の中で造立工人をこれほど明確にした例はあまりなく、傾聴すべき考察であると思う。筆者も斉藤博士と同じく、東南アジア各地域の石窟、磨崖仏を見学し、同じような考えをもつに至っていた。仏像造像には義軌にしたがわねばならぬことや、七一〇世紀の磨崖仏には覆堂がしばしばみられ、石仏寺という構想によっていることなど共通点が多いからである。

白杵石仏は、戦後しばしば調査がおこなわれた。その都度調査にあたった筆者は、古園、ホキ二群一、二龕などで建物遺構の一部と思われるものを察知し、重要な磨崖仏には覆堂が存在していたと推察した。果して前述の如く古園石仏には七間三間、東西一七・五五メートル、南北約七・五〇メートルに及ぶ大きな建物趾を確認することができた。このように石仏の配置から、石仏寺の構想が生まれたのであるが、こうした状況からも大陸における石仏寺としての窟仏、磨崖仏との関係を無視することはできない。

白杵石仏は凝灰岩の軟質岩面に彫刻するものであって、その造作にあたっては木彫師が使用するノミをもちいることもできる。それ故にあえて石工専門の仏師を必要とすることもない。現存の磨崖仏自体が木彫風に彫

像され、これに彩色を加えると完全に木彫にみえる。特に重要な磨崖仏が藤原彫刻の流麗な姿態として定朝様の都振りを余すことなくあらわしている。そのような石造技法の背景を考える必要もあるう。

「白杵荘三百町、領家一条前殿下御跡地職」『豊後弘安凶田帳』

これからみて中央貴族が石仏造営にあたったと考えることもできる。とすると定朝様式の木彫風の彫法仕上げの様子もうなずける。更に造立者を的をしぼって検討できる。それは白杵の開発領主の研究である。緒方惟基（緒方、白杵、三重の三姓があてられている。）以下の略系図の中で渡辺澄夫博士は、十二世紀前半に出生したといわれる惟基の四代惟隆と白杵氏から分かれて緒方姓に移った惟栄の両者によって白杵、菅尾石仏が造管されたと推理する。この推論は、考古学的見解、古瓦の編年や、土師の研究による年代推定とほぼ合致し、承安二年如法埋経、建久年中覆堂を含めて造立完成という見方とどうやら符合する。

都振りの木彫風磨崖仏が中央帝都の仏師の手になったのか、十二世紀後半には宇佐あたりに造仏所があつて多くの仏師をもっていた可能性も考へられる。ここで豊後磨崖仏の造立について唐代技法の流入説、わが中央仏師による木彫風技法の導入説など興味深い問題を多くかかえることになった。

おわりに

白杵磨崖仏の研究は主なものをあげても小野玄妙博士による現地調査、京都帝国大学考古学研究室（『豊後磨崖石仏の研究』）などによって一般に知られるようになった。戦後は九州大学美術研究室の実測調査がおこなわ

れ、文化庁、大分県・白杵市による保存工事にもなう各種の調査が継続的におこなわれてきた。これらの調査研究にあたられた学者の数は相当数にのぼるとみられるが、戦後の調査にあたって、筆者はこれらまでそのすべてにわたって関係してきた。文化庁による基礎的修復調査によって岩盤の剝落は修理され、更に基本的な岩盤亀裂の研究修復が進められつつある。そして、仏体の剝離にも根本的な手当がおこなわれようとしている。こうした研究の中で、磨崖仏造立の問題にも議論が深まり、これまで不明な点の解明もされつつある。最後に述べたように、造立の根底に唐代美術の流入があつたか、わが木彫師の導入によつて特異な藤原芸術の所産とみるのか、更に多くの問題が残されている。これらについての基本的な問題が未解決といえる。白杵石仏に関する限り難解な問題が次第に解決され、やがて、造立に関する諸問題が解き明かされる日が来るものと思われる。最後に実測図、写真は菊田徹・藤田晴一氏の作成したものを使用した。両氏の友情に心からお礼を申し上げる。

参考文献及び論文

- (1) 小野玄妙「大乘仏教芸術史之研究」一九一八
- (2) 浜田耕作「豊後磨崖石仏の研究」京都帝国大学文学部考古研究室編、一九二五
- (3) 小田富士雄「豊前における新羅系古瓦とその意義」九州発見朝鮮系古瓦の研究(一)「史淵」第八十五輯九州大学文学部、一九六一
- (4) 賀川光夫、入江英親、小田富士雄「弥勒寺遺跡」大分県文化財調査報告書第七輯、一九六一
- (5) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考」九州発見朝鮮系古瓦の研究(二)「史淵」第九十五輯、九州大学文学部、一九六六
- (6) 西谷正、栗原和彦訳、朴容煥著「百済瓦当に関する研究」(1)「考古学ジャーナル」四八、一九七〇
- (7) 西谷正、栗原和彦訳、朴容煥著「百済瓦当に関する研究」(2)「考古学ジャーナル」五〇、一九七〇
- (8) 西谷正、栗原和彦訳、朴容煥著「百済瓦当に関する研

- 究」(3)『考古学ジャーナル』五〇、一九七〇
- (9) 小田富士雄他『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡』大分県文化調査報告書第二六輯、一九七三
- (10) 岩尾順、窪田勝典『大分の磨崖仏』一九七四
- (11) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考」二、『九州文化史研究紀要』第二十号、九州大学文学部、一九七五
- (12) 田村圓澄「九州浄土教の開花」『芸術浄土』—特集・九州の浄土文化、一九七八
- (13) 小田富士雄「南朝墳墓よりみた百済・新羅文物の源流」『九州文化史研究所紀要』第二十六号、九州大学文学部、一九八一
- (14) 賀川光夫「宇佐、国東、臼杵の遺跡」『三愛新書』—人間と文化、一九八一
- (15) 菊田徹他『臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』臼杵市教育委員会編、一九八二
- (16) 賀川光夫「大分県の磨崖仏」『臼杵石仏の造頭と熊野大日石仏の姿態』『郷土史展望』一九八一
- (17) 倉田文作、田村圓澄、賀川光夫他『大分の古代美術』大分放送、一九八三
- (18) 斉藤忠「韓国における窟仏・磨崖仏とその石工技術の日本への導入に関する一試考」—九州の磨崖仏に関連して—『九州歴史資料館開館十周年記念、太宰府古文化論議』下巻、一九八三
- (19) 小田富士雄「九州の古代寺院—とくに七、八世紀の創立寺院について—」『九州歴史資料館開館十周年記念、太宰府古文化論議』下巻、一九八三
- (20) 小泊立矢「二豊の宗教と文化—美術」『大分県史』古代篇—一九八四